戦後70年

未来へ繋ぐ

戦争の記憶

昭和20年8月15日に第2次世界大戦が終戦して70年。
長崎・広島の原爆、沖縄大空襲など多くの犠牲を出した戦争でした。
小林にも、当時、戦争に巻き込まれた人たちがいます。
戦争の記憶を風化させないためにも、その体験談から
今ある平和、守るべき未来の平和を一緒に考えてみませんか。

戦後70年の節目の年 平和について考えよう

戦争は、人々の心に深い傷跡を残しました。今年は、戦後70年の節目の年。時代は進み、戦争を経験した人は少なくなってきています。そして、その記憶は少しずつ薄れつつあります。

日本にいる私たちにとって、当たり前のようにある平和。しかし、世界では未だ紛争は絶えず、多くの犠牲者が出ています。

今、改めて戦争の悲惨さや平和の尊さを考える時期に来ているのかもしれません。再び悲劇を繰り返さないためにも。戦争の記憶を風化させないこと、次の世代に語り継いでいくことが、今を生きる私たちの務めではないでしょうか。

今月号では、戦争を経験した4人にお話を伺いました。

地方創生

連載

Vol.2 「地方創生推進会議」始まる

市が策定する総合戦略の検討、検証などを行う「小林市地方創生推進会議」が始動しました。

委員は、公募6人を含む各分野の23人で構成。ＪＡ、商工会議所、医師会や地域の代表らが参加しています。

第1回目となる推進会議は、6月29日に市役所大会議室で開催。地方創生の制度、人口変動や経済状況について情報を共有しました。なお、総合戦略は10月末までの策定を予定しており、今後3回ほど推進会議を開催し、議論を重ねていきます。

次回（8月12日予定）からは、人口ビジョン（人口の中長期的な展望）などの本格的な議論がスタートします。

□市地方創生本部（企画政策課） ☎23-0456

若者60人が意見交換

幅広い市民が参加し、自由に意見を出し合う「真のこばやし創生をめざす市民会議」の第１回を、７月２８日に開催しました。

今回のテーマは「若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる」。市内の事業所などから約６０人の若者が参加しました。

この会議で出された意見は、総合戦略の策定や推進に生かします。今後もテーマを変え、幅広い市民の意見を集約していきます。

高校生の意見も反映

小林市では、高校卒業後の人口層が大きく減少する傾向が課題となっています。そこで、高校在学生など（約550人）の「進路」、「将来の帰郷への課題」などについて、アンケート調査をしています。

この調査結果をもとに、実態を把握し、総合戦略に反映します。

アンケートに協力ください

宮崎県と小林市では、地域経済の好循環を創出するモデル事業を実施します。この事業の基礎とするため２つの調査を８月に実施します。ご協力をお願いします。

■住民アンケート

無作為抽出による1000世帯へ、収入・支出の状況を調査

■企業アンケート

市内６割程度の事業所へ、出荷・販売額、仕入調達の状況を調査

フィリピンでの避難生活

あと数日で助かった命。今でも忘れられない

野尻町東麓在住
大保（おおぼ） 文枝（ふみえ）さん

フィリピンでの3年間の避難生活。家族全員が生き残れたことは本当に運が良かったのだと思っています。

フィリピンが戦場に苦しい避難生活始まる

昭和10年、19歳のときからフィリピンのマンピシンに住んでいました。夫と子ども4人の6人家族で、麻づくりの仕事をしながら幸せな日々を過ごしていました。しかし、昭和16年、真珠湾攻撃をきっかけにフィリピンは戦場へと変わっていきました。

ある日、私たちが住んでいた集落は、日本軍の命令でダバオというまちに船で避難することになりました。その途中、初めて爆撃に遭遇。それから、死と隣り合わせの生活が始まりました。

米軍は、基本的に10時～14時の間に爆撃を行っていました。14時を過ぎたら「今日も生きていられたね」と声を掛けあったものです。また、事前に次に爆撃する地点を示したビラをまいていたので、その場所を避けるために、まちを転々としていました。

多くの人が死んだ今でも忘れられない

避難生活は、本当に辛い毎日でした。食べ物はなく、丸2日飲まず食わずの日もありました。多くの仲間が、爆撃ではもちろんのこと、飢えで亡くなっていきました。

そんな生活の中で、一番心に残っているのは、終戦数日前の出来事です。主人と友人らが山に芋を採りに行き、爆撃に遭遇。主人は、爆風で吹き飛ばされ、お腹を負傷し、血の便がでるほどの重症に。一緒にいた友人の一人は被弾し、亡くなってしまいました。

その夜、私たちが寝ていると外から大きな爆発音がしました。おそるおそる見ると、爆撃で亡くなった友人の奥さんが、自ら手榴弾を投げ、子ども2人と心中。しかし死にきれず、子どもたちの首を絞め、最後は自分で自分の首を絞めて亡くなっていきました。

その数日後に、終戦の日を迎えました。あと数日早ければ、その家族の命は助かったと考えると、今でもやりきれない気持ちでいっぱいです。

避難生活で、多くの人の死を見てきました。今でも、出来事ひとつひとつが忘れられません。しかし、私の家族は全員生き残ることができました。それだけは、本当に運が良かったのだと思っています。

▶当時のアルバムは、今でも大切に保管している

長崎の原爆で被爆

炎で赤く染まるまちが、目に焼き付いています

西諸原爆被爆者の会
中間（なかま） 正智（まさとも）会長

原爆、核兵器は本当に恐ろしい兵器。世界中が平和になるためにも長崎、広島のような悲劇が起きないことを願っています。

もし外に出ていたら命はなかったでしょう

私は、当時7歳で長崎市内にある小学校に通っていました。父は軍に入っていたため、母と妹の3人暮らし。爆心地から約1・7キロの場所に住んでいました。

その日はとても暑い日でした。私と妹は裸のような格好で昼食を食べていたとき、空襲警報が発令。大きな戦闘機が飛んできました。すぐに逃げようとしましたのですが、私も妹も服を着ていなかったので、慌てて着替えました。着替え終わり、母と妹が外に出ようとしたとき、原爆が投下されました。大きな音とともに爆風で家が倒壊。一瞬の出来事で、何が起きたか全くわかりませんでした。母は、背中に熱線を浴びてしまい、ひどい火傷を負いました。私は、家から出ていなかったので、熱線を浴びることはありませんでした。もしあのとき、慌てて家を飛び出していたら、おそらく命はなかったと思います。

一晩中燃え上がるまち地獄のようだった

ケガをした母は、私に妹と近くの「稲佐山」に逃げるよう言いました。外には、全身を火傷した人が、道路でのた打ち回り、近くの川に飛び込んでいました。本当に地獄のような世界でした。私は、妹の手を引き必死に走りました。山の頂上に着くとまちは真っ赤に染まっていました。一晩中燃え上がっている様子が今でも、目に焼きついています。

原爆、核兵器は本当におそろしい兵器です。世界中が、平和になるためにも、二度と長崎、広島のような悲劇が起きないことを願っています。

イベント情報

ヒロシマ・ナガサキ 原爆と人間パネル展

被爆から70年を経た今、西諸原爆被爆者の会主催の「原爆と人間」パネル展を開催します。多くの人に見てもらい、あらためて核兵器の恐ろしさ・怖さを見つめてほしいと願っています。

◆日時
8月8日（土曜）
9日（日曜）
9時～16時
◆場所　中央公民館
●問
・危機管理課
TEL 23-1175

西小林小の機銃掃射

朝一緒にいた友達の姿は、もうどこにもなかった

南西方在住
木佐貫（きさぬき） ヒサエさん

戦争は繰り返してはいけない。
これからの時代を担う人には
その想いを受け継ぎ
平和な未来を築いていってほしい。

奉仕活動に向かう途中一瞬の出来事だった

あの日のことは、よく覚えています。とても天気のいい日でした。私は、いつもと同じように、仲の良い友達と学校に行きました。

当時、子どもは、お国のために、奉仕団として農家の手伝いに行くことがありました。その日も、数班に分かれて奉仕作業に行くことになりました。私の班は、石塚にある畑にむかっていました。西小林駅付近を歩いたとき、警戒警報の鐘の音が聞こえてきました。そして、遠くから大きな飛行機がこちらに向かってきました。最初は、日本軍の飛行機だと思っていました。しかし、どんどん低空飛行で近づいてきて、次の瞬間、ダッダッダッ…。何が何だか分からない一瞬の出来事でした。

私は、たまたまお腹に抱えたお弁当にぐっと力をいれて立ちすくんでいたら、腕と脇腹の間を銃弾が通り抜けていき、銃弾の破片が、太ももに当たりました。そのときは、全然痛くなくて、駆け付けた大人たちに声を掛けられ、木の陰に足を引きずりながら歩いて行きました。今思うとよく逃げられたなと思います。そして、木の陰で倒れていると、戸板に乗せられ病院へと運ばれました。

友人の姿はなかった今でも涙がでてきます

そして、それから3ヶ月ほど入院する日々が続きました。でも、私は運が良かったほうです。ケガですんだのですから。その日の朝、私と一緒に学校に行った友人の姿は、もうどこにもなかったのですから。

入院中、窓の外をみるとトンボが飛んでいたことをよく覚えています。不思議ですね。今でも、この季節に、トンボが飛んでいるのをみるとどうしても思い出してしまい、ふいに涙がでることがあります。その友人が生きていたら今でも仲が良かったんだろうなと考えながら。

私たちのように、戦争を経験した人は、もうすぐいなくなります。日本人は、70年間反省を続け、多くの人が戦争を繰り返してはいけないと実感しているはずです。その想いを忘れず、これからの時代を担う人たちには、日本、世界に戦争のない未来を築いて行ってほしいですね。

▶西小林小グラウンドにある「殉難者の碑」

戦争で父を失った

戦争に行く父が誇り。感覚がおかしくなっていた

小林市遺族共助会
岡原（おかはら） 信夫（のぶお）会長

私のように大切な人を
失い悲しむ人が大勢出てしまう戦争
もう二度と繰り返さないことを
願っています。

父がお国のため出征苦しい生活が続く

父は、昭和16年、私が9歳のときに出征しました。当時、軍に入るのが当たり前で、さみしい気持ちよりも、お国のために戦争に行く父を誇りに思っていました。役所から、「出征兵士の家」という表札をもらい掲げていたのが、本当にうれしかったのを覚えています。父が死ぬかも知れないのに。戦争中は、感覚がおかしくなっていました。

戦争は徐々に日本が劣勢になり、生活は苦しくなっていきました。家族は、母と祖母、6人の兄弟で、食べ物もなく苦しい生活が続いていました。長男であった私は、父の代わりになろうと家のことを一所懸命にしていました。

父からの最後の手紙弟と妹を立派に導いて

昭和18年3月、父は戦地に派遣されることが決まりました。沖縄・九州間の海上警備が任務だったようです。戦地に出ると連絡をとることが困難になります。そんな中、昭和20年1月13日、父から私宛に1通の手紙が届きました。5枚に渡るその手紙の中には、「まだ、子どものお前に無理な言い方かもしれないがお前は父の身代わりとなって弟や妹を立派に導いてくれねばならぬ」、「すべてを頑張りぬいて立派な国民になるように」と書いてありました。これが、父からの最後の手紙。この手紙を読むと今でも涙が出てきます。そして、立派な社会人になれるように努力して父の死を無駄にしないために頑張って生きてきました。

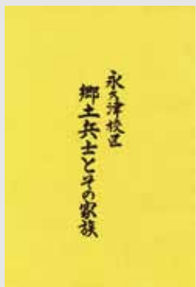
私のように、大切な人を失い悲しむ人が多くでてしまう戦争は、もう二度とあってはなりません。

苦しみや恐怖を知り次代へとつなげていく

取材をした4人は、大切な人を戦争で失っています。だからこそ、「戦争は、二度と繰り返してはならない」と言葉を強めていました。

戦争を経験していない私たちは、当時苦しみや恐怖の中で生きてきた方々の思いを知り、次代へとつなげていくべきはないでしょうか。

それが、「平和な未来」への架け橋となるはずです。



▶岡原さんの父からの手紙は、「永久津区郷土兵とその家族」にも掲載されています。